

古稀の中国・羊城記

(共同通信社) 竹内 健二

<六>

中華人民共和国は10月1日の国慶節をもって建国70年を迎えた。人生七十古来稀なり——。さて、国家の寿命はどれぐらいあるのだろうか。

<七>

軍事パレードに合わせ、江沢民元国家主席が天安門上に姿を見せたのは報道された通り。1926年生まれの93歳というから共和国より長生きである。だが、古希どころか傘寿や卒寿も過ぎた老幹部は彼だけではない。CCTVが夜のイベントの前に読み上げた賓客の名前に驚いた。李瑞環——元中国共産党政治局常務委員、元人民政治協商会議主席。1934年生まれなのだから存命でも不思議ではないが、筆者の世代にとっては歴史上の人物だ。ひとしきり感心していると、総局の助手が教えてくれた。「宋平もいましたよ」。

<八>

元党中央組織部長(元政治局常務委員)である。こちらは1917年生まれというから、五四運動すら始まっていない時代だ。まことに中共の「領導」である条件は健康長寿かと言いたくなるが、これは万骨枯る権力闘争を運良く生き抜いたからこそその結果論であるかもしれない。

<九>

とはいえ、いま両氏の業績を記憶する市民は少ないだろう。試みに、エズラ・E・ウォーゲル『現代中国の父 鄧小平 上下』(益尾千佐子・杉本孝訳、日本経済新聞出版社、2013年)をめくってみよう。2人の名は下巻に見える。1989年の天安門事件の直後に、第13期中央委員会第4回総会(4中総会)が開かれ、両名は政治局常務委員に昇格した。同8月、鄧小平は彼ら常務委のメンバーを

集め、自身の引退計画を告げている。元老政治を終わらせ、江沢民体制を確立するためだった。つまり、良くも悪くも言おうか、現在の中国の繁栄と一党独裁の維持に向けて鄧小平がレールを敷いた、いわば過渡期の舞台脇役が彼らであった。

<十>

その鄧小平が苦心した香港の「一国二制度」はいま、長引く市民の抗議活動により動揺している。筆者は香港問題に直接関わっていないので、安易な論評は避けた。ただ、今後の大陸と香港の経済的なパワーバランスはどうなるだろうか。目下のところ、国際的な金融センターとしての香港の役割を大陸の他の地域が代替することはできない。しかし、習近平指導部は既に香港とマカオ、広東省を一体化して大経済圏とする「ビッグベイエリア(大湾区)」構想を打ち出しており、今年8月には広東省深圳市を「世界トップレベルの経済力」を持つ都市に育てる計画も公表した。これをほら吹きとみなせば足元をすくわれるだろう。現中国が成立したころ、香港返還の日が来るなどとは多くの人々が考えなかっただろうから。

<十一>

先日、そのビッグベイエリアの一角を担う広東省広州市を訪ねたが、改めて北京と比較して気づいた点がある。車である。北京は街中を見ればベンツにアウディ、ポルシェかBMWかといった具合で、猫も杓子も高級車の感がある。これに対し、広州はそうでもないのだ。それは、北京の方が経済力が高いということではないだろう。統計的証拠のない私見だが、おそらく先に(鄧小平の号令で)経済発展を遂げた南方都市の方が「車慣れ」しているのだ。いってみれば、トヨタやホンダぐらゐのクラスで(他意はない!)事足りる人の層が多い、つまり中間層が比較的厚いのではないか。広東も格差問題は深刻だと思うが、意外な「底上げ」も同時に進んでいるのであれば、鄧小平はやはり、気の長い布石を打ったのだろうか。